

# フィールド風

(現場)からの

宮田守男

平成28年を迎えた。世界規模での温暖化なのか、至下最強のゴジラ・エルニーニョの影響なのか、世界各地で異常な現象が毎日のように報道されている。

大北地域も、12月は、穏やかな暖かい日が続き、充分な降雪に恵まれず、地域経済に大きな影響を与え続けている。

元旦に届く知人からの年賀状。一枚一枚読みながら、

差出人との思い出に懐かしさを覚えるが、喪

中の為、新年のあいさつができない人が年々増えていくと実感する時でもある。

毎年元旦のみ届けられる、スポーツ紙を含む新聞各紙の全紙と、世界経済を予測する経済雑誌に目を通す事を心掛けているが、戦争

勃発など、予測できない事態にならないようにと願うばかりだ。

最近出会った本に、「がん哲学外来」の開設者で、がんで不安を抱えた患者と家族を、予約制・無料の個人面

談など対話を通して支援を行うなど、医療現場と患者の間にある「隙間」を埋める活動

## 年の初めに悔いのない人生を生きるために 自分の生き方について考えてみませんか

「隙間」を埋める活動を続けている医学博士「樋野興夫」の「明日この世を去るとして、今日の花に水をあげなさい」の著書だ。死を意識した患者との

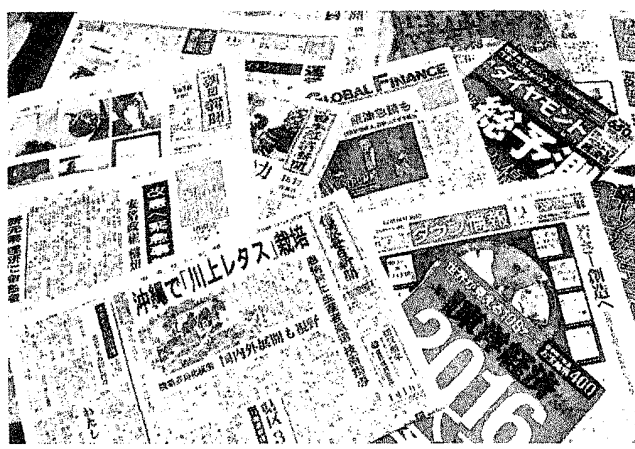
体験があったからこそ、読み手の心を揺さぶるのだろう。20代・30代は人に言われたことを黙々とがむしゃらに。40代は、自分のやりたいことや好きなことに専念。50代は積極

的に周りの人の面倒を。60代で自分のことばかり考えていたら恥と見え。自分を含め、60代の皆さんが、恥と思われような生き方をしているのだからかと考えさせられる。

「あれもこれも」より「これしかない」で

「どうすればいいのかわかる。やっぱり最後は人間同士のふれあいが必要。相手が間違っているとしても否定しない。出会いが人を、階段を上ったかのように成長させる。難しいことはみんなである。歯をくいしばって人を褒める。忙しそうにしていると、人は心を開かない。か

らなくても、わかる。やっぱり最後は人間同士のふれあいが必要。相手が間違っているとしても否定しない。出会いが人を、階段を上ったかのように成長させる。難しいことはみんなである。歯をくいしばって人を褒める。忙しそうにしていると、人は心を開かない。か



異なった視点から予測される内容に、楽観的な気分より危うさを感じる報道が気になる

ら始まる文章。そして最終のページ。所詮私たちに、座布団一枚分の墓場しか残らない。あなたも私も最後は、みな同じ場所に帰っていく。これから

の与えられた人生をどの様に生きるべきなのか考えさせられた内容だった。  
(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)